

心豊かに歩みたい

脇坂 公子

助産婦

松宮さん、なつかしい声をきかせていただいて、ありがとうございます。助産婦学校での数々の思い出がかけめぐります。松宮さんはもちろんのこと、第一線で活躍していらっしゃる方々の随筆を読ませていただき、看護に対する情熱と仕事に取り組む姿勢には頭がさがる思いです。私は不器用な性格で、家庭と仕事の両立はできないと専業主婦になり、13年たってしまいました。

しかし子育ても一段落した今、何か少しでも看護や助産に関わりたい、やっぱり助産婦が好きなんだという気持ちでいっぱいです。私が助産婦としてやっと一人前になるために、どれ程多くの方々から学び、支えられたことか。ゼロからの再出発かもしれませんが、少しずつ地域社会に参加できたならあと、胸をときめかせています。

東京馬込の社宅からの出発

私たちの新婚生活のスタートは、唯一庭が広いだけがとりえのマッチ箱のような団地でした。同じ年頃のカップルがいっぱい。社宅での生活の基本は、他人の生活には深入りせず、かといってお付き合いは程々に。新入りは、月1回の共同清掃に必ず参加し細々と動きまわること、バケツ当番はすすんで行ない、朝夕のあいさつは笑顔とともに実行することなどを心掛けました。

そんな生活の中で、昭和55年5月に長女圭子が誕生いたしました。同じ頃、社宅ではあちこちで子供誕生のニュースが聞かれました。ベランダには、オムツの花がいつせいに開きはじめました。助産婦として一応の知識はあるので、お茶飲み会(井戸ばた会議のようなもの)では母乳栄養の利点

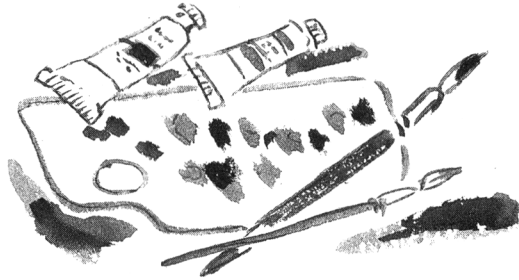
やおむつの縫い方、あて方などを話すことができました。みんな育児書は熟知していましたが、どう応用していけばよいかわからない状況でした。たとえば、うつぶせ寝が良いとふわふわの布団で寝かせているとか、産後最初の月経があるまでは妊娠しないとか、きめ細かい生活指導の必要性を感じました。

子育てに明け暮れた日々

みんなで助け合い励まし合いながらの生活の中で、圭子は食べる量は少ないものの、元気で活発な子供に育ちました。社宅の庭は格好の遊び場、当時大人気のアラレちゃんの帽子をかぶり、木々の枝をものともせず、かき分けかき分け未知なる世界を探検したものです。ついたニックネームは「ジャングル圭子」。たんぽぽの咲く頃、息せききって「おかあさん」。見ると手には大きな赤いチューリップ。「きれいでしょ。はやくお母さんに見せてあげたくって……」私は目が点になりました。「きれいなえ。もらったの」「ううん、A棟の庭に咲いてたんだ。それはOさんが、大事に大事に育てたチューリップでした。しかし、私は圭子をすぐには叱ることができませんでした。

また北風の吹く日のこと。キャーとか、気持ちいいとか、大喜びの声が聞こえてきます。何を楽しそうにしているのかしらとふと見ると、薄氷の張っている水たまりで、日頃仲のよいボーイフレンドのS君とともに、バシャバシャ。「お母さんもいっしょに入ろうよ。楽しいよ」

圭子が2歳7か月になったとき、次女加奈誕生。昭和57年12月、夕食にすき焼きを食べていたら、



10分間歇で規則的陣痛が始まりました。入浴中内診をしたら、子宮口5cm開大で、やわらかい。夫が付きそい、徒歩10分の産科に到着。お産はスムーズに終わりました。お産で手のかからなかった子供は後々まで手がかからない(?)とみえ、外遊びの大好きな子でお人形遊び、絵本は苦手。男の子と走りまわり、おやつと昼食の時だけ「ただいま」と帰ってきました。雨の日はなんとか本好きにさせようと、絵本を読み聞かせる私でしたが、子供は上の空。雨が止むとそれと外へ飛び出す有様。常に生傷が絶えず、頭に白い包帯が巻かれること3回。その度に私は病院まで全力疾走したものです。

子供の個性は、生まれた時からそれぞれに備わったものだから、自分の理想とする型にはめようとしないこと。どんどんほめて自信をもたせること。叱る時には、感情で叱ってはいけない、一呼吸おいてよく話を聞いてからと、なかなか実行することのできない自分に言い聞かせながら育児してきました。

夫は常に自分にきびしく、愛社精神いっぱいの人。細やかな心配りで、家族をいつも温かく見守ってくれています。いっしょに夕ごはんを食べる回数は少ないけれど、子供たちもそれなりに理解し、愛情を感じているようです。

黒潮おどる高知へ

土佐の人は、陽気でよく飲みよくしゃべります。女の方は、はちきん(口八丁、手八丁)と呼ばれよく働きます。はちきんさんには、手とり足とりお世話になりました。PTAでは「友達がすぐできる

き」と役員までさせていただきました。こちらの土地は自然の恵みがいっぱい。素晴らしい足摺や横浪の海の青さ、海岸線の風景に私たちはすっかり魅了され、土日になるとバーベキューセットを車に積み、双眼鏡を持ち、魚が手ですぐえそうな川や、ホエールウォッチングができる海へと出かけました。

子供たちはのびのびと生活し、たくましく成長しました。親の心配をよそに、うまくクラスにとけこみ、友達づくりにはげんでいるようでした。方言を使うのも、子供なりの交際術らしいです。子供大好き校長先生とも出会い、ほんとうに充実した3年間を過ごすことができました。

そして現在、私たちは主人の転勤により、人情味あふれる素朴な土地、福島県郡山市へと移り住むことになりました。

すっかり主婦の目で、子育てのエピソードを書いてしまいました。子供たちも小6と小4になり、今では「お母さん、春っていう字はね、三人が日なたばっこしている字なんだよ」と教えてくれたりします。そして毎日をいかに楽しく過ごすかに、力を注いでいるようです。過保護にならず、木の上で立って見守る親でありたいと思います。自然を愛し、感動し、慈しむ子供であってほしいと願っております。

* * *

次にお願いする方は、助産婦学校の同級生関山みどりさんです。現在、恵比寿保健相談所の保健婦さんとして活躍されています。もうすぐ5人目の赤ちゃんが生まれるそうです。関山パワーみなぎる随筆を期待しております。